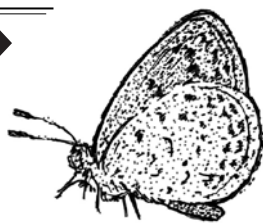




# 中里基の視点から



May 13, 2020(令和二年)

Vol.017

## 中里基の視点から

### さらに本気の熱量を

5月15日をもって退社する、リブセンスの取締役を務めた中里基さんにお話を伺った。

入社は2014年8月。かつての同僚であり、当時リブセンスの取締役だった中島真さんに誘われ入社した。中里さんにとっては「何をするか」よりも「誰とやるか」のほう

が、はるかに心が躍るとい

う。今回のNewsPicks社への移籍においても、以前の同僚や仕事仲間であった創業者の梅田優祐氏や佐々木紀彦氏との縁を強く感じたのが大きかった。

取締役を務めた中里さんにとって、近年のリブセンスの最も重要な変化の一つは「村上さんへの過度な依存が、良い

意味で剥がれてきていること」だと語る。執行役員会の創設や意思決定フローの整備によって、属人的だった組織の特徴が変わり始めていることを語った。

リブセンスについて、「やるべきことはやっているが、まだ全員が本気でやっている感覚はない。一方で、カルチャーや会社の輪郭を作っていることに対しては、とても力を入れてきた稀有な会社だと思っています」と中里さん。最後の仕事として、コロナ対策に注力してきた中里さんにと

って「COVID-19がもたらしたものは、強い者が生き残るではなく変化対応の大事さ」が持論。その上で「今のリブセンスのオープンな企業風土や社会課題に対する意識を維持しつつ、プロダクトの成長や業績などに向き合う熱量を上げ、その上で環境変化への対応力を組織の体質として獲得することが、今後のさらなる成長のキーだと思います」。

新体制で迎えた15期目、リブセンスの矜持を見せたい。(城川勇汰)



エッセンス・オブ・リブセンスを語る(撮影：中野悦史)

## 事業外の貢献を

### 広くメンタルケアを支援

4月16日に株式会社Colleeの提供するメンタルサポートプログラムへの支援が発表された。リブセンスが100回分のプログラムを購入し、従業員と一般向けに半分ずつ提供する。利用者はクーポンコードを入力して申し込むと、45分のプログラムを3回まで無償で利用できる。悩みや相談事を記入し、パーソナリティ診断を経て、カウンセラーとマッチングする。利害関係のない第三者との会話を通し、自身に改めて目を向ける。発表して5日と経たず一般向けは枠数上限に達したという。ステークホルダー

以外にプログラムを提供する取組みは、異例ではないだろうか。

「事業以外にも社会に貢献する」という指針を実現する機会だと思ったからです。導入を推進した人事部長の遠藤正幸さんが話す姿は自然体だ。「迷ったのは比率くらいですね」。一般向けの数はもっと多くした方がよいのでは、と思ったという。広報の西部真理映さんは、問い合わせも多く、社内外ともにポジティブな反応が多かった取り組みと振り返る。「こういう所がうちの会社のいい所」とコメントをつけてツイートする人がいて

嬉しかった、と笑う。環境が激変し、会社として何を大切にしているか、これ程に問われているタイミングはない。今回のプログラムの支援にはリブセンスの姿勢が強く現れたのではないだろうか。(志賀響子)

### うたかた

イノベーションの種は、強みと弱みが裏表一体。自分の軸も学びをばぐして棚卸し中(佐々木晋哉)

変化の種は急に転がり込んでくるもの。今年を節目の年にする人も多いんだろうな。(末吉貞治)

最善を望み、最悪に備え結果として起こった事を面白がる人生に。今まで本当にありがたい。(中里基)



## Zoomでラジオ体操

### リモートならではの繋がり

始業20分前にパソコンを立ち上げ、Zoomで集合。4月下旬から開始した「オンラインラジオ体操」の参加者が徐々に増えているようだ。発起人の人事部・酒井美樹さんに話を聞いた。

「始めようと思ったきっかけは？」

4月半ばに心身の不調を感じ、散歩・ヨガ・ラジオ体操など一人で試行錯誤していました。「この状況ってたぶん私だけじゃないよな。ラジオ体操なら気軽にできるか

### 論説

オフィスは果たして必要だろうか。既に手放したという会社も見聞きする。終わりの見えぬコロナ禍において、もしくは順調に見えるリモート体制を経て、オフィスの必要性に疑問を抱くのも当然だろう。あるいは検討が遅すぎたのかもしれない。コロナ以前からオフィスを持たない会社も多かった。▼しかし、必要性への問いかけは大きな危険も孕んでいる。オフィスは必要か、この会議は必要か、イベントは必要か、交流は必要か。掘り下げて問えば問うほど効率化された代替手段が見つかる

って、必要性は煙のように消えてゆく。そうして不要を削り続ければ余白や遊びも消え去って、最後に残るのは健康と生産という痩せ細った生のみである。▼コロナ禍でわかったことがあ

も」と思い立ち、翌日に概要をまとめて周知、という流れで始めました。

「実現までに困難はありましたか？」

特にないですね。勢いに任せてえいや！でやっていたので。それでも乗ってくれる方がたくさんいるのがリブセンスの良さだと思っています。「雑談にも使ってもらえた」と最初はRenoを使っていたんですが、無料期間が終わったので今はZoomでやっています。

Zoomの方がひとつの動画を皆で観ながら進められるので、結果、使い勝手が良いです。

「参加者の反応は？」

「良い運動になった」「気分転換になった」などのお声をいただいて、ほとんど皆さん2回以上参加されています。一番嬉しかったのは、宮崎オフィスの二階智美さんが9時始業の方向けに始めてくださったことでした。場所や雇用形態問わず誰でも参加できる企画にしたい、オンラインだったからこその繋がりができてとても嬉しかったです。

リモート勤務から生まれた温故知新。気になった方、まずはStackの「#オンラインラジオ体操」へ！(松田多恵子)



往復書簡

成長しない  
僕ら

細井広太郎×平尾静

第八回

細井さんにもそんな過去があったんですね。人は皆、自らの進むべき方向を考える機会を持つていると思うのですが、その際に見つけた指針をいかに大事にし、そこに向けて進むことができるかこそが、これまで議論してきた成長に関する一つの解なのかもしれません。「人生に正解はない」。使い古された一文ですが、百人いれば百の思想があり、百の人生があります。「成長」についても同じでしょう。この二文字の中に「足るを知る」だとか「後悔しない」だとか、個人の成長の両立は可能人にとって大事な言葉を探し、当て嵌め、棄却し、また当て嵌め直してゆく。この作業こそが人生であるように思えます。選ぶ言葉は人それぞれですから、進んだ先にいる人物は他者から見ると「成長しない僕ら」かもしれません。しかし、歩んだ道を振り返る時、自分の中には晴々とした歩みの跡が確かに存在する。この手ごたえが「成長」なのではないかと、一連の議論を経てあらためて思うのです。さて、成長についての議論もひと段落。ここで一度中締めとして、次回以降、会社組織を含む「共同体の成長」に議題を移すのはいかがでしょうか。個人主義と共同体は相性が悪いとよく言われますが、個人の成長と共同体の成長の両立は可能でしょうか。ぜひご意見を伺いたいです。（平尾静）

Look. If you had one shot or one opportunity, to seize everything you ever wanted in one moment, would you capture it or just let it slip?

なあ、もし1回、ただ1回だけ。チャンスがあつて、それを掴め

リレーエッセイ

過呼吸

ば一瞬で夢がすべてかなう。そうになったらどうする？ 勝ちに行くか？ それともそのまま諦めんのか？ お前ならどうするんだ？

EMINEMの2002年発表の名曲《Lose Yourself》の冒頭に出てくる歌詞だ。

チャンスはいつも1度きり

HIPHOPをこよなく愛した高校生の頃に、友達の早田くんがEMINEM主演の映画《8 Mile》を観に行つて、彼のラップとこの歌詞に衝撃を受けたのを今でも忘れない。そして振り返ればこの時から「チャンスらしきものが来たときは躊躇せず受け入れる」という価値観が生まれたように思う。

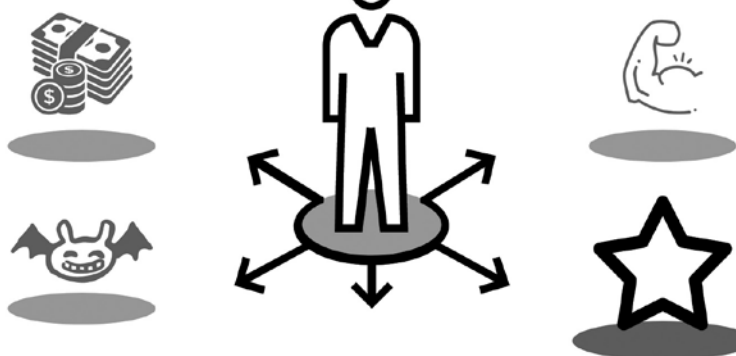
大学に入り、建築学科を専攻して空間デザインについてもりと学び始めた。と同時にHIPHOP文化とも言えるブレイクダンスの練習にも明け暮れていた。（書いてみるとチャライ）

大学3年のとある日に、高校時代の親友から

「知人が起業したんだけどオフィスの内装デザインと施工ってヤスでできる？」と相談の電話が来た。校舎の中庭あたりの階段で座って電話してた気がする。そしてテンパっていた。「やってみたいけど授業以外で実際に設計・施工するなんて初めてだけど大丈夫か？」と。少し考えさせてほしいと口にした矢先、すでに《Lose Yourself》のこの歌詞が浮かんでた。would you capture it or just let it slip?

「いいよ、是非やりたい」麻布台にある100平米ほどの元診療所

Just one shot, one opportunity.



（提供：石川康裕）

だった場所を、女性向けのダイエットプログラムを提供する事業のオフイス兼セミナールームに改装したいという要望だった。予算はたったの90万円。しかし当時は大金に思えた。なんとか引き渡し予定日までに完成させるべく奔走した。まずは1人じゃ負いきれない内容なので大学の友人らを巻き込み5人体制に。空間デザインをなんども考え提案書をつくった。そして家具を買い付けにまわり、ちやうどいい棚や机がなければオリジナルでデザインしてDIYしたり、壁を塗装したり、とにかくがむしゃらに内装をつくりあげた。2007年のクリスマススイブだったと思う。ペンキだらけになりながら完成したオフイスで祝杯をあがった。未経験かつ低予算ながらなんとかやりきったのだ。しかし、単位は落とし留年した。その後もうろんな局面で「マジで？ これいけるかな？」と足がすくむような判断をするときに、チャレンジングな方を選ぶ癖がついた。断ってしまったら、チャンスの神様に見放される、そんな気がするからだ。加えて言えば、面倒な局面から逃げる癖がついてしまふとも思っている。

過去にステイプジョブスは人生について「フロントガラス越しに先のことを見ようとしてもよく見えないけど、バックミラーを通じて歩んできた道についてはハッキリ見える」というようなことを語っていた。

集なんだと思う。これからも、今日の前にしている機会や状況が「今回っきりだ」と考えてがむしゃらにやり抜いていこうと考えている。チャンスは何度もは訪れない。大概が一度きり。もう二度と手がけることはできない、そんな心持ちで打ち込んだら、きっと思いがけない結果に出くわすはずだから。

石川康裕

転職ナビ事業部直下兼メディアG所属。2020年1月入社。横断的に各種施策に従事。いつか「戦略×デザイン」をテーマに本を書きたい。1986年生



Women Who Go Tokyo

完全オンラインのGo言語勉強会  
毎月第4水曜日開催（詳細はcompass.jp）

不動産オンライン講座

フィルライフでは不動産講座を毎日開催中  
リブセンス社員にも多数活用頂いています！



テキスト広告募集

掲載無料！お気軽にお近くのLivesenseTimes編集部員、または桂までご連絡ください☺